

ヨコハマポートサイド街づくり協議会

2 0 1 1 M A R C H

GALLERYROAD

YOKOHAMA PORTSIDE



ヨコハマポートサイドらしい ライフスタイルの提案を

人が住み、人が働き、人々が訪れる…ヨコハマポートサイド地区にも暮しが薫る街としての時間が流れるようになりました。「アート&デザインの街づくり」というコンセプトが掲げられてから、すで20年以上。いよいよ人々のさまざまな暮らしぶりが豊かなハーモニーを奏でる時代に入っていきます。

この街から、ヨコハマポートサイドらしいライフスタイルを提案していく…
いよいよ、そのための一歩を歩み始めるときがきたようです。

SPECIAL FEATURE

横浜駅から10分とかからぬ場所に この空間があるということ
ポートサイド公園という“魅力”

3 ~ 4 page

ESSEY

ポートサイド公園から 19年目の往復書簡

5 ~ 8 page

これだけ秀逸な造形に出会える空間に
自分たちの場所として愛されているのであれば

松 葉 一 清
長谷川 浩 己



NEW completed & open

宮川香山 眞葛ミュージアム

9 ~ 10 page

EVENT &

アート縁日／山田岳ギター・コンサート
かんきょう「組写」フォトコンテスト

11 ~ 12 page



SPECIAL FEATURE

横浜駅から10分とかからぬ場所に この空間があるということ

ポートサイド公園という“魅力”

ポートサイド公園は1992年に行なわれた「ヨコハマポートサイド地区水際公園公開設計コンペ」の応募作品171点（登録件数526点）から第1等に選ばれた長谷川浩己さんのデザインによるものです。コンペでは横浜のデザイン都市の先駆けであるヨコハマポートサイド地区に相応しいデザインであるとともに「都市の中のやすらぎの空間」であることが求められていましたが、現在のポートサイド公園は、まさに「やすらぎの空間」。喧噪の中にやさしい時間を提供しています。



ポートサイド公園 主要部についてのイメージ・スケッチ

【ギャラリーブロード】エノキ並木と舗装から構成され、長さ400mにわたり建物群の南面をつなぎ、低層レベルの商業施設と結びついた活気ある線形プラザ空間を形成する／高層ビルの垂直軸と明解な対比なす強い水平軸はポートサイド地区全体を抱きかかえる緑の腕である【中央広場】ステージやテーブル、椅子を配し、ここでは野外コンサートなども開かれる／ギャラリーロードからの眺めとして、ビルの中に突然現れる緑のうねりは大きなインパクトを持ち、地区全体の景観の中で重要なエレメントのひとつとなる／緑の芝生に埋められた赤いポディウムはベンチであり、また彫刻の台座である【うねる芝生】幾重にも折り畳まれた芝生のうねりは太陽の動きによって刻々と姿を変える／適度な傾斜は腰を下ろしたり、寝そべるのに最適であり、水面を臨む観客席となる。【東西広場】レンガ舗装と鉄の壁、鉄の円柱により構成される。天幕を張ってイベントなどに使われる／円柱のいくつかは開口部を持ち、人はその中で切りとられた空を見上げる。【アシ原】アシ原は季節を映し、風になびく原風景の断片である。人々はデッキの上からアシ原の中に立つことができる。／アシ原の中に整然と建ち並ぶアルミポール。水面からつきだすアルミポールの浮標は波を受けて揺らぐ。夜は先端に隠し込まれたLEDがランダムな点滅を始める。

.GALLERY ROAD 第4号（1993年3月発行）「ヨコハマポートサイド地区水際公園について」より

ギャラリーロードから公園に入る、その入口付近には「うねる芝生」があります。

長谷川さんは、GARRELY ROAD 第4号に寄せた文章のなかで（この芝生について）「幾重にも折り畳まれた芝生は太陽の動きによって刻々と姿を変える」「適度な傾斜は腰を下ろしたり、寝そべるのに最適であり、水面を臨む観客席となる」と語っていらっしゃいます。

長谷川さんは、この空間を、訪れる人が、自然に「季節の流れ」や「一日の時間の流れ」などを体感しながらおもいおもいの時間を過ごしてもらえようと、この空間をデザインされたように思います。

ご承知のようにポートサイド公園は、活気ある、あの横浜駅東西口という空間から、徒歩で10分とかからぬ場所にあります。しかしながら、この空間には、そうしたことがまったく信じられないほど、やさしい時間が流れています。風が吹いています。



昼休みを過ごす会社員の方がいらっしゃったり
お子様と遊ぶパパやママがいたり、ベンチに座って
読書をされている白髪の紳士がいらっしゃったり、
たまには釣り竿を片手にした腕白の少年たちに出会
うこともある…みなさん、それぞれに、おだやかな
時間を過ごしていらっしゃいます。

毎年10月になると、この公園でアート緑日が開催
されてきました、しかし、この数万人を動員するイ
ベントの特徴は、その動員数が信じられないほどに
おだやかであることです。

ふっと立ち止まることができる。立ち止まれば風を感じることができる。

今日という時代にあれば尚のこと、このことはとても貴重なことです。私たちはポートサイド公園という空間を大切にしていきたいと考えています。

公園でちょっとインタビュー

- 子どもたちを遊ばせながら、よく、ここでひなたぼっこをしています。 30代女性 主婦
- ランチのあとに、このベンチで海を見ながらボーッとしているのが好きなんですよね(笑)。30代男性 会社員
- たまにですが、天気のいい日にはここに来て本を読んでいることがあります。 70代男性 会社役員
- 買い物の帰りに真っすぐ家に帰らずに、少し、ここで海からの風にあたっていることがあるんです。50代女性 主婦

400mの海辺

水ぎわに沿って約400m続くプロムナードはエノキの並木と石畳が特徴になっています。低層部の商業空間との連動性を豊かにしたいということから、当初より街区部分と公園との境界はあいまいなものとしてデザインされたようです。

また、水ぎわには、当初より葦原の復元ということが織り込まれていました。葦原につきでた木製デッキに立つと、直接、その葦原に立って海辺に臨んでいるような感覚を味わうことができます。

長谷川さんは、行政が管理する上ではここは公園ではあるけれど「ここはヨコハマポートサイド地区の歩行空間の一部であり、周辺の街区へ、そして地区外部へとつながっていく空間である」ともおっしゃっています。



ヨコハマポートサイド地区水際公園公開設計コンペ 審査員 松葉一清氏へから
一等当選案設計者 長谷川浩己氏へ

ポートサイド公園についての 19年目の往復書簡

これだけ秀逸な造形に出会える空間に

ヨコハマポートサイド地区水際公園公開設計コンペ 審査員（当時） 松 葉 一 清

まだランドスケープ・アーキテクトという言葉が社会に浸透していなかった1992年、「ポートサイド公園」の国際コンペがあり、わたしたちは長谷川浩己さんの案を1等を選びました。それからもう19年になりますが、建築の評論の領域から審査員に選ばれたわたしにとって、横浜を舞台に新たに設けられる「公園」を審査するというのは、とても新鮮で興奮する出来事だったので、今でも思い出します。

審査員のなかで「造園系」と「建築系」の意見がぶつかりあい、最終段階で審査委員長だった渡辺定夫・東京大学都市工学科教授が「今回は初めてのこと、造園のみなさんの意見を尊重しましょう」と宣言して、長谷川さんの案を全員の総意で選びました。わたしは、長谷川さんが米国の著名なランドスケープ・アーキテクトの事務所の出身と知り、またひとり魅力的な新星が、日本に降り立ったことを祝福したい気持ちでいっぱいでした。

土地バブルの余熱が残り、横浜は「みなとみらい」を牽引車にして、積極的に「アーバン・デザイン」に挑戦していました。この「公園のコンペ」も、当時、多士済々の面々が揃っていた横浜市の都市デザイン室肝入りの先駆的な試みのひとつでした。

程なくバブルは完全崩壊し、パーソナルコンピュータの日常化によるヴァーチャル・スペースの拡大も、現実の都市空間を脇役に追いやっていきました。ポートサイドの街づくりも停滞を余儀なくされ、せっかくの長谷川さんの公園は、当初ポートサイド地区を立ち上げた「アート・アンド・デザイン」の都市を実現するという意気込みが明確でなくなり、いつか、影が薄くなったのも事実です。

しかし、次々と高層住宅が立ち、新たなポートサイドの住民が現れ、生活消費施設も揃い、同時にオフィスも着々とその数を増した近年、公園はやはり「ポートサイド地区」に欠くべからざるものという評価が、この街で暮らし、仕事をしているひとびとの間ではっきりと自覚されつつあります。それは、なによりも喜ばしいことです。

2月末に、首都圏の気温が突如20度を超した日、わたしは長谷川さんにお手紙を書くこともあり、公園に出向きました。今年2度目の訪問です。折から、あたたかい突風が吹きすさび、淡い黄金色に美しく枯れた水際の葦の一本一本が激しく揺れ、交錯して重なり合う光景に目を見張りました。これぞ「都市のなかにあるべき自然の姿」と思えたからです。

強風を受けて、運河の水面は少し波立ち、木々は心地よい音を立てながら揺らぎ、そこで葦がひととき目をひく姿でそよんでいたわけです。輝く葦のすぐ傍らでは、長谷川さんが水面に向けて突出させたデッキが、木製の柔らかさと鋭角の厳しい造形を両立させて存在感を発揮していました。完成から20年近くを経ているのに、金属製のポールとワイヤーからなる手摺りは、ぴかぴかと銀色の輝きを放ち、葦の金色の輝きと「美の協奏曲」を奏でていました。なんともうれしくなるような光景でした。水辺に残されたわずかな自然が、都市にとっていかに大切なものであるかを、「ポートサイド公園」は身をもって教えてくれるのです。



横浜のウオーターフロントで、これだけの秀逸な造形に出合えるのは、ここだけでしょう。「ベイクオーター」を背に、公園の500メートル近い長辺を遠望すると、長谷川さんの造形が計算され尽くした配置で展開していることが読み取れます。三角の鋭角のデッキは水辺の葦に見え隠れしながら、規則正しい間隔で配置されています。まさにそれは都市のリズムとなって、わたしの心に響きました。水辺のこのデッキが鋭角の美学だとすると、地上では緩やかな曲線の芝生のマウンドが変奏の調べとなり、鋭さと柔らかさが織りなす造形の妙に気づきます。

そして、その公園の空間に多くのひとが集っていました。春風に誘われて住民たちが一斉に出てきたのです。小さな子供たちを遊ばせる若い母親のグループ、愛犬を散歩させる中高年のみなさん、そして、仕事の途中、やはり長谷川さんの手になる木製のベンチにゆっくり腰掛けて水辺を眺めるビジネスマンも複数見かけました。

ここには横浜の他の水辺のそここを占めているような、大きな商業施設はありません。無償の公共の空間としての公園が、商業施設とは明確に一線を画した、飽きのこない仕立てで、もう20年近くも生き続けているのです。公園は、今日もまた近隣の多くのひとたちに愛され、育てられているのです。歓声をあげて芝生のマウンドを駆け上がり走りおる子供たちを見て、わたしは、この公園を長谷川さんに委ねて本当によかった、そして、審査員のひとりとしてあらためて長谷川さんに感謝したいと思いました。

もちろん、日本中に、そして世界中にこんな公共空間が広がればよいと思います。でも、現在は「ここだけ」なのが、ポートサイドの街づくりに携わってきた人間として、誇らしく思えてなりません。

自分たちの場所として愛されているのであれば

一等当選案提案者（ポートサイド公園 設計者） 長谷川 浩己

ご丁寧なお手紙、そしてなによりもポートサイド公園に対して温かい眼を注いでいただき、ありがとうございます。
本当にもう20年以上も経ってしまったのかと、今更ながら信じられないような思いです。あの頃はアメリカから帰ってきたばかりで、突然松葉さんや伊東さんなどにお会いするような事態となり、なんだか不思議な気分でした。審査において建築系と造園系との間でかなりの議論があったとのこと、私も受賞後にいろんな方から人づてに聞いたことがあります。今では大分その溝が浅くなったようにも思いますが、20年前ではまだまだお互いに良く分かり合えていない状況があったことは否めません。私自身日本の大学の学部レベルではデザインを勉強していなかったのですが、なぜアメリカまで渡ったかというよりは、その辺の事情も背後にあったように思います。風景というのは建築はもちろん、ありとあらゆるもので構成されている世界です。それらを学ぶのに、日本には行きたいと思える学校がその時はなぜか見つからなかったのです。

千年を超える造園や作庭という素晴らしい歴史の蓄積が、庭園という閉じた空間の闘を超えた、もっと広い世界を考えるにあたって、逆に災いしてしまったのかもしれませんが。アメリカの大学もいろいろですが、私の行った大学院では一つの学部の中に、建築、ランドスケープ・アーキテクチャ、アーバン・デザイン、ファインアートなどがまとまっており、文字通りそれらをまたがって授業を受けることも可能でした。そう言った環境に惹かれて「まずは日本を一度出てみよう」と、そんな感じでした。その後サンフランシスコで仕事にも就き、気がつけば彼の地でほぼ10年を過ごしており、帰国して最初にやったことがこのコンペへの参加、そしてなんと最優秀賞へ選んでいただくという顛末は、私にとってこれ以上ない新たなスタートとなりました。

ランドスケープデザインの目指すことをあえて一言で言えば、様々な関係の在り方を探る、ということです。先の話で言えば、ポートサイド公園の風景のなかで、私の考えたかたちはごく一部であり、実際に我々が日々眼にするものは、対岸のみならず21の建築群、帷子川の水面、貨物線の鉄橋、様々なものが織りなす関係がその場その場の光や雨や、または風の中で姿を現してくるものです。



関係とは何か、もう少し踏み込めばそれは他者との付き合い方とも言えるのかもしれませんが。都市においてそれは文字通り、この場を共有する他者との関係だけではなく、鉄橋や道路、ここで暮らす人々のマンション、そう言った様々な他者の意思の顕れの結果としてそこに存在する事物との関係です。そして目を人間以外に向けたとき、それらは並木の樹木であり、水際の葦原であり、またはその場所を好んで棲み着いてくれた蟹たちのことでもあるのです。私の考える他者とは全ての意志ある者たち、そして彼らとその意志の証として残したかたちのことです。自然とは人間以外の何物かではありません。人間やその生活を取り込んでなおそこに存在する、より大きな何者かだと思います。

もちろんここはアマゾンの大自然ではありません。樹木は潮風に当たるこの地域でも育つ樹種を選び、かつ堅く締まった土壌を改良して植えています。葦原は大きなチャレンジでした。既存の護岸を壊すことなく新たに設計したPCブロックを用いながら、横浜港の水際の風景を柔らかく変えうるプロトタイプとなる事を目指していました。小さなかたちが増幅して大きな風景を変えていくことをもくろんでいたのです。全てがお互いに干渉しあって都市が成立し、その内に生態系と言うシステムが取り込まれている。私たちはこういう世界を目指すべきであろうと思うし、私自身が関与する機会を与えられれば、その場所に来うる限り豊かな関係性を見たいと思っています。そういう場所こそ、私たちが本当に居たいと思える場所になると信じているからです。

葦原はそれ自身で一つの系を生み出すこと、その系を壊すことなくその上に人々が滑り出して行って、そこで風に吹かれて音を立てる葦原の只中に立てること、そしてその目の前の水面の対岸に立ち並ぶ新しい街の風景を眺められること。そしてすぐ後ろを振り返れば私たちが住んでいる街が目の前にあること。それぞれがそれぞれ自身でありながら、お互いがお互いのために存在していること。私がこの公園で目指したことはこういう関係性の構築でした。芝のマウンドも三角のデッキも、エノキの並木も、全てがお互いのためである、そう言ったかたちの関係をずっと探してきました。

20年経った今、一個ずつのパーツは多少くたびれてきたとはいえ、松葉さんが言われるように、もし未だに、もしくは今まで以上にこの公園が街にかけ込み日々の生活の中で自分たちの場所として愛されているのであれば、その関係の仕組みが曲がりなりに機能しているのだという証としてとてもうれしく思います。

※ 6ページと7ページに掲載の写真は松葉一清氏の撮影によるものです。

松 葉 一 清

Kazukiyo Matsuba

30年以上にわたり、専門誌、学術誌、一般誌など多彩なフィールドで、都市と建築、さらに都市文化全般にわたる論考を行なってきた。また、朝日新聞編集委員として同領域の社会的な課題の論考を連載し、ポスト・モダンをはじめ建築論の先導役として活躍。現在、武蔵野美術大学教授（造形文化・美学美術史）。また、長年に渡り、公益信託基金ヨコハマポートサイドまちづくり trusts の運営委員を務めている。

主な著作に『日本のポスト・モダニズム』三省堂、'84年。『帝都復興せり！―「建築の東京」を歩く1986―1997』朝日文庫、'97年。『モール、コンビニ、ソーホー デジタル化がもたらすポピュリズム』NTT出版、'02年。

長 谷 川 浩 己

Hiroki Hasegawa

'85年大学院卒業後、サンフランシスコにてハーグレイブス・アソシエイツ勤務など。'91年まで在米、帰国後、ササキ・エンパイロメント・デザイン・オフィスを経て、'98年にオンサイト計画設計事務所をパートナーとともに設立。現在、武蔵野美術大学教授（建築学科）。

主な作品に、日本橋コレド広場リニューアル計画（グッドデザイン、JCD デザイン賞共同受賞）、丸の内オアゾ・ランドスケープ、星のや 軽井沢・ランドスケープ（AACA 芦原義信賞、ARCASIA GOLD MEDAL、JIA環境建築賞グッドデザイン 賞、土木学会デザイン賞・選考委員特別賞）など。

2010年10月

ヨコハマポートサイド ロア参番館に
宮川香山 眞葛ミュージアム が
オープンしました

2010年10月、ヨコハマポートサイド ロア参番館1階にわが国有数の眞葛焼コレクター 山本博士さん（「世界に愛されたやきもの MAKUZU WARE 眞葛焼 初代 宮川香山作品集」の著者）によるコレクションが展示されている「宮川香山 眞葛ミュージアム」が開館しました。初代 香山の作品を中心に当時の欧米を驚かせた日本の技芸を体感することができます。



眞葛焼とは／宮川香山とは



わが国を代表する貿易港であった横浜港近くには、開港当時から様々なジャンルの名工たちが集まっていました。

なかでも眞葛焼（まくずやき／陶磁器）は出色のもので、この窯を開いた宮川香山（初代）は、当時、欧米で開催されていた万国博覧会にたびたび作品を出品し、その度に高評を得て受賞作を連発、専門家たちを驚愕させていました。

初代香山が横浜に窯を開いたのが明治3年（1872）年のことでしたが、銅牌を受賞したフィラデルフィア万博は明治9年の開催。金牌を受賞したパリ万博が開催されたのが明治11年です。つまり、初代香山は横浜で作陶を始めて、わずか数年で国際的な地位を確立していたというわけです。

「幻のやきもの」に

その後、初代香山は、今日でいう人間国宝（無形文化財）にあたるプライム“帝室技芸員”に選任されるなど（明治29年）、押しも押されもせぬ名工として歴史に記憶される存在になっていきます。

しかしながら、横浜大空襲（昭和20年）にて工房は焼失。そのとき、香山の名跡を継承していた三代目香山も家族、スタッフとともに亡くなる（二代目は昭和15年に死去）という不運に遭い、眞葛焼は「幻のやきもの」になっていきます。



YOKOHAMA PORTSIDE

眞葛焼は、マイセンの陶磁器に柿右衛門をはじめとする有田焼の影響が色濃くみえるのと同じようにロイヤル・コペンハーゲンなどにも、大きな影響を与えたといわれています。

青華菖蒲画花瓶 初代宮川香山作



初代香山、初期の特徴はいわゆる「高浮彫り」にあるといわれています。

左のページ（9ページ）の写真は「宮川香山 眞葛ミュージアム」に所有されている作品「磁製蜂二鳥花瓶」（上）「磁製蟹細工花瓶」（下）ですが、ともに高浮彫りの傑作とされているものです。

初代香山は、明治15年頃からデコラティブな作品よりもオーソドックスなやきものづくりへと作風を変えていきますが、中国陶磁器などから釉薬、釉法などをよく研究し、眞葛焼を見事に陶器から磁器へと転換させていきます。

開館時間 10:00~16:00 開館日 土曜日、日曜日のみ開館（但し年末年始など休館あり）

尚、平日でも4名様以上でご来館をご希望の場合は、4日前までにご相談ください。臨時開館できる場合もございます。

入館料 大人500円/中・高校生200円/小学生以下 無料

所在地 ヨコハマポートサイドロア参番館1階2 電話番号 045-534-6853 管理・運営 株式会社 三陽物産

アート縁日19

ART-ENNICHI 2010

残念ながら2日間とも「雨」の開催になってしまいました。第2日め（10月10日）午後には晴れ間も見えるほどに回復しましたが、特に第1日目の夕方は激しい雨になり、出展者のみなさんにも、ご来場のみなさんにもあいにくのコンディションになってしまいました。

そうした状況にも関わらず、雨の中出展を続けていただいた出展者の方、傘をさしながら、たんねんに各ブースをご覧いただいた来場者のみなさんには、心より御礼申し上げます。

当初は、新しい開催形式のイベントとして、新しい情報を発信するためにと企画された「アート縁日」ですが、すでに19回の開催を重ねてきて、出展者やご来場のみなさんは、このイベントに新しい価値を見出していらっしゃるようです。

例えば、年に一度、この場で“いつもの出展者”にまた出合って「元気でしたか」と声をかけ、また作品を買い求める…そうしたことが、この街で歳時記のように繰り返されていくこと。もちろん出展者どうしても、そうしたことがあって、ある「つながり」が確認されていく…現在のアート縁日はトレンド・セッターというより、人と人の「つながり」をコーディネートする場として、みなさんに愛されるイベントになっているのだと思います。

この都市にあって、和やかに人の「縁結び」ができるイベントは貴重です。それ故、私たちもアート縁日を大切にしていきたいと考えています。今後は、より天候に左右されないかたちで、安定的な開催ができるように工夫をし、さらに息の長いイベントとして、みなさんのご期待にそえるよう頑張っていきたいと思っています。



今年度アート縁日大賞
各賞受賞者のみなさん

アート縁日大賞 横浜まるまる堂 菅野則子 さん
アート縁日賞 CHEESE&TACOS 高見沢ちづるさん
Anjesroom 有山彩乃さん

■ 入場者数 約32,000人



GAKU YAMADA

Guitar Concert

A Little Bit Consert Vol.3 開催される

2011年1月29日、幸ヶ谷集会所に、ギタリスト＝山田岳さん（昨年末に行なわれ朝日新聞主催第9回現代音楽演奏コンクールにおいてギタリストとして初の優勝を果たされた方です）をお迎えしてのコンサートになりました。

この「A Little Bit Consert」シリーズは、演奏力のある奏者の方の演奏を、少人数で楽しむことを、一番の醍醐味として企画されたものですが、今回はまさに「少人数」ということが大きな魅力になっていたコンサートだったと思います。山田さんも横浜での演奏会は初めてだったそうですが、演奏しながら温かい気持ちになれたと喜んでくださっていました（すでにご来場のお客様と山田さんのツイッターを通じての交流も始まっているようです）。

すでに、ほとんどの席が予約受付開始1、2日で埋まってしまうほど人気の企画になってきました。

これからも「小さい」をいかしてやさしい、和やかな 街かどコンサートをつくっていきたいと思います。



Gaku YAMADA

2010年 11月23日 かんきょう組写フォトコンテスト 本選が開催されました

昨年の11月23日、コンカード横浜にて、かんきょう組写フォトコンテスト本選会が行なわれました。このフォトコンテストは、環境啓発をテーマに、2枚から3枚の写真を組み合わせて表現するというもので、神奈川県内の高校生を対象に作品が公募されました。各賞は、あらかじめ呼びかけに応じた35歳以上の大人と、会場を訪れた高校生が、それぞれの部門に分かれて（「大人の見方部門」「高校生の視点部門」）に投票をし決せられるというもので、専門家に拠らず一般的な市民の視点から各賞を選んだという点でユニークな公募展だったといえます。

主催：リサイクルデザインタウン映像フェスティバル実行委員会

併催イベント参加団体 東京都市大学ISO学生委員会
Hama Boom Boom Project / 学生NPO Face Find
横浜市資源リサイクル事業協同組合



YOKOHAMA PORTSIDE



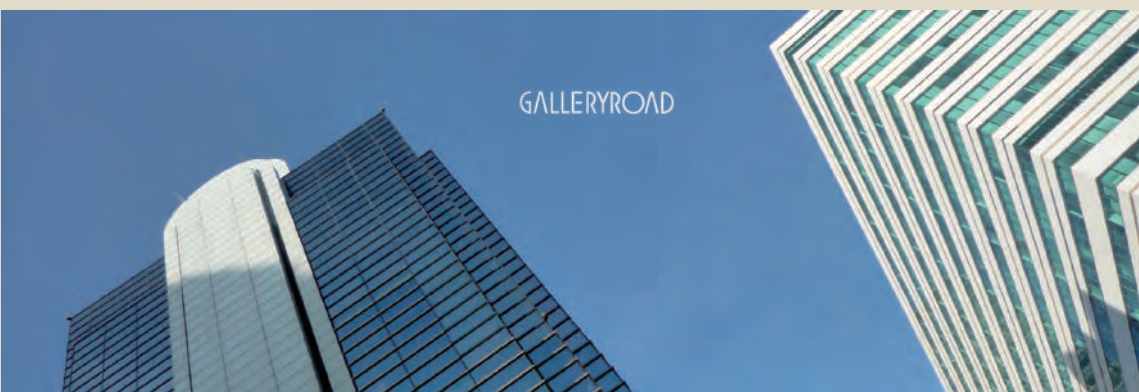
街づくり協議会 会員企業及び団体

株式会社 大塚商会
株式会社 加藤美峰園本舗
神奈川トヨタ自動車 株式会社
菱重エステート 株式会社
京急開発 株式会社
株式会社 相鉄アーバンクリエイツ
中外倉庫運輸 株式会社
トーヨーカネツ 株式会社
独立行政法人 都市再生機構
ソフトバンクテレコム 株式会社
畠山物産 株式会社
三井不動産 株式会社
三菱重工業 株式会社
三菱倉庫 株式会社
ハドソンジャパン 株式会社
財団法人 横浜市建築助成公社
横浜市住宅供給公社
株式会社 ランドビジネス
横浜市



YOKOHAMA PORTSIDE

2 0 1 1 M A R C H



発行 ヨコハマポートサイド街づくり協議会

web-site = <http://www.portside.ne.jp/>

編集 ヨコハマポートサイド街づくり協議会 アート & デザイン・コーディネーター事務局

Phone 045-243-2013